

ディアスポラとしてのジャクソンがもたらす攪乱と解放

有馬 弥子

マードックがアルツハイマーと闘いながら完成した絶筆『ジャクソンのジレンマ』の解釈において、ジャクソンの役割、人物造形、さらにジャクソン自身の内面にどう踏み込み分析するかが核心である。作者は、タイトルにおいて既にジャクソンの存在のみならず、彼のジレンマという立ち入った内面さえも提示している。しかし物語展開ではまず、あたかもジャクソンよりはそれぞれの屋敷の所有者エドワードやベネットの二人、及び二人をとりまく人々の人間関係が物語の主軸であるかのようなプロットを前面に出している。中盤では、二軒の屋敷ハッティングとペンディーンの所有者たちと周囲の人々の過去、現在、未来が様々に交錯する要所所で、ジャクソンの存在と言動がプロットを展開させている。最終的に物語終盤ではジャクソンが主体として提示され、一人牧草地にたたずむジャクソンの思考の叙述で結ばれる。

この最終場面で読者は、ジャクソンが何者であるかという問いに対する答、すなわちその答は存在しないという答と対峙する。このような幕引きと、第一章でベネットと既に死去している伯父のティムがアイデンティティーについて語り合う場面で論じる実存的真実のテーマとが共鳴する。すなわち、個々人は確固たるアイデンティティーに

安住することはできないのであり、誰しもが何者でもないという哲学である。ジャクソンの存在を通じ人々がこのような認識を迫られる時、人々の内面に引き起こされるものは苦悩でもあり歓喜でもある。なぜなら、人物らがそれまでしがみついていたアイデンティティーは、安心のもとでもあり同時に傲慢さや破ることのできない暗い殻など負の側面と無縁ではなく、それらからの移動、解放により人々は先へ歩み始めるからである。

出自が明かされることのないジャクソンのアイデンティティーはディアスポラのそれである。他の人物たちはディアスポラとしてのジャクソンとは対比しているかのような構成で登場する。しかし、一見ジャクソンとは対照的な確立したアイデンティティーを持つかのような多岐にわたる多くの英国籍の他の登場人物たちにとってのアイデンティティーの揺らぎや哲学的真実が、ジャクソンのディアスポラ性との交錯によって次々と導き出されていく。その過程は不安をも伴うが、第一章のティム伯父のアイデンティティーについての講釈にある言葉を借りれば「恩寵」をももたらす。本篇を結ぶ最終センテンスにはジャクソンは「微笑みを浮かべた」とある。その微笑みはあくまでもディアスポラとしてのそれであり、神秘的である。その複雑さの意義を重層的に分析することに

より、ジャクソンが登場人物らにもたらすものは何なのかが明らかになる。

ジャクソンの特性はまさに単一的な固定したアイデンティティーをもたないことと、ジレンマを内包し続けることとにある。その動的で流動的なアイデンティティーによりジャクソンは、可変性、流動性を失った固定的な関係において生じがちな膠着的な差異、上下関係、差別関係、あるいは停滞した思考や状況を攪乱し活性化させ、人々を自由な発想に導き解放する。ジャクソンは人々の心の解放をもたらす触媒的な役割を担っているのである。ジャクソンにより攪乱され解放される人々の喜劇とも悲劇ともつかない展開をこのよう

に読み解くと、ジャクソンによりもたらされる解放は、人々の自己の内側でうごめき他者を束縛し傷つけるエゴ、自我への執着からの解放を示唆する例のようにも読める。

本作品がマードックがアルツハイマーを患う苦しみの中で書かれたこと、ジャクソンが生と死の境をさまようかのような結末さえ提示されていること、これらは、ディアスポラの、境界を曖昧にし境界を崩す破壊性と恵みが、生と死の境さえも曖昧にしてしまうことに対するマードックにとっての恐怖、およびマードックがそこに感じていたかもしれない恩寵を意味しているのかもしれない。